

2022 横浜ナザレン教会・待降節第一主日(11/27)礼拝説教

「主イエスの喜び」

マルコによる福音書第一二章 41～44 節

【聖書】

12:41 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

1 何故、この箇所？

今日は、クリスマスを待つ待降節第一週の主日です。なのに、どうしてマルコ福音書の「やもめの献金」と言われる聖書を読むのだろうか、怪訝に思った方もいるかもしれません。中には元首相暗殺事件を思い出した方もいらっしゃるかもしれません。やもめとは夫を亡くした妻のこと。経済的な柱を亡くして困窮しているやもめが多いのは、聖書の時代も現代も変わりないようです。元首相暗殺事件には、夫に先立たれた母親が巨額献金をして家庭が破壊されたことが背景にあり、と伝えられています。

今日の聖書は、ここだけ読めば、主イエスが「生活費の全てをささげることが強めに勧められている」というふうに見えるエピソードです。どうして、待降節第一週の礼拝でこの聖書を取り上げるのでしょうか？その理由について、これからお話したいと思います。

2 献金について

まず、最初に申し上げたいのは、主イエスは決して「生活費の全てをささげよ」と強制してもおられないしすすめてもない、という事です。今日の聖書の少し前、主イエスとの会話の中で、最も大切な教えについて、次のように語った一人の律法学者がいます。「『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんなささげものやいけにえよりも優れています。」すると、主イエスは彼に対して「あなたは、神の国から遠くない」ととても喜ばれました(マルコ12:32～34)。又、続いて、今日の聖書の直前で、主は、権威をかさに着てふるまう律法学者たちを厳しく非難してこう仰います。「やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」(マルコ 12:40)。当時の律法

学者たちの中には、やもめの家で長いみせかけの祈りをして大きな報酬を得ていた者もいたのでしょう。主はこれらの学者を鋭い言葉で糾弾しています。ですから、本人や家族の生活を破壊するような献金をどうして主イエスが、又、父なるみ神が、喜ばれる筈がありましようか。

私はキリスト者になる前、神社仏閣の近くに行った時は、どこの誰が祭られているかもよく知らないままに、ゲン担ぎにお参りをしていました。柏手を打ってお賽銭を入れ、金額以上の願い事をしていました。信じてはいませんが、ただ「もしかしたら願い事を叶えてくれる時の代金」位の気持ちで、小銭を賽銭箱に投げ入れました。そこに感謝の想いは微塵もありませんでした。

教会の礼拝に出るようになって、主イエス・キリストのみ名で天の御神にさげられる献金と神社のお賽銭は、全く違うものだ気づかされました。主の礼拝における献金は、献金すれば救われる、という「救いの条件」ではありませんでした。既に主イエスによって救われており、日々支えられていることへの感謝と賛美だと知ったのです。

そして、神はそれぞれに合わせて働いてくださいます。だから、献金の額は、他の人と比べてどうこう言える種類のものではない、という事も教えられました。当たり前のことのように、この事に徹するのは案外に難しいものです。2000年の教会の歴史の中でも、多額の献金をする信徒の意見が重んじられ、教会の決断を左右することが度々ありました。多額の献金をする信徒こそ重要な信徒、と考えるのは、この世の価値観です。神とは関係ない人々の中では当たり前のことです。教会の中にもこのような価値観は入り込んでいます。しかし、聖書の神が深く愛されるのは、弱く貧しくされた小さい人々です。今日の聖書にあるように、額が多いからと言って主イエスに喜びをもたらすとは限りません。私たちの教会は、神を知らない人々の価値観ではなく、神の価値観に徹して生きたい、と改めて願います。この世の価値観で運営される教会なら、ここに存在する意味はないのですから。

3 やもめの生き方

さて、よく知られた今日のエピソードを共に見て行きたいと思います。今日の聖書、よく知られているようで、実はとても非常に奇妙な物語です。当時のエルサレム神殿には、「女性の庭」と呼ばれる庭があり、そこに十三のラッパ型をした賽銭箱が備え付けてあったそうです。「女性の庭」というのは、「女性だけが入れる庭」という意味ではありません。「そこまでは女性も入れる庭」という意味。その庭より奥に進むことが出来るのは、ユダヤ男性だけでした。十三の賽銭箱には、神殿改築費用とか、犠牲のささげものをささげる代わりに献金とか、それぞれに目的が決まっていた。十三個目の賽銭箱は目的が特になく、自由献金をささげるもの。ささげ方も日本神社の賽銭とは随分違います。どの賽銭箱にも祭司がそばに立っていました。そして、献金する人が祭司に目的と金額を告げると、それを復唱し、実際にその額が正しくささげられるか、チェックしていたようです。ですから、41節、賽銭箱の向かい

に座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた主イエスも人々がいくら献金していたか、その額を知ることができたのです。

ラッパ型の賽銭箱ですから、入れられた硬貨の落ちる音は、増幅して辺りに響き渡ります。金持ち達が次々と投げ入れる高額な硬貨の立てる音は、一層大きく鳴り響いたことでしょう。しかし、その中に貧しくみずぼらしい、一見して寡と判る身なりの女がいました。彼女は、レプトン銅貨二枚、即ち一クアドランスをささげます。レプトンとは当時流通していた通貨の中でも最小単位です。ルカ福音書やマタイ福音書には、人の目には価値の低いもののシンボルとして「二羽の雀が一アサリオンで売られている」という表現があります。この一アサリオンというのは、四レプトン。「どうして雀を二羽まとめて売ることか」というと、一羽分の雀を売って、0.5アサリオン、つまり二レプトンを代価として得ても商売人は何の儲けにもならない、だから、雀は二羽まとめて四レプトンで売らなければならないのです。つまり、このやもめがささげた二レプトンという額は、売り物にもならない雀一羽分の価です。どういう事かと言いますと、やもめのささげた二レプトンでは何も買えないのです。しかし、それが彼女の全財産、生活費全て、でした。「その金額では何も買えない」というと、今の日本ではいくらくらいでしょうか。おそらく10円か20円位、100円まではいかないでしょう。そのような何もまともに買えないような金額をやもめはささげ、それを主イエスは非常に喜ばれた、というのです。実に奇妙な話です。10円、20円の金額だけを考えれば、献金しても、しなくても同じこと。それはささげられる神殿側にとっても、そしてささげる寡にとっても、です。500円とか1000円であれば、寡もそのお金で何食分か食いつなぐことができたでしょう。しかし、10円、20円手元にあっても、なくても、何も変わりはありません。寡はどうして、こんな少額をささげたのでしょうか、そして、どうして主イエスはこのように喜ばれたのでしょうか。

彼女の姿を思い浮かべていた時、ある引退牧師から聞いた話を思い出しました。その牧師がまだ神学生であった、今から60年以上前の昭和30年代のこと。「主の祈り」の講義で教授が話したことです。教授は、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」との主の祈りの一部を次のように講義してくださったそうです。「これは、要するに“神さま、にこよん！”って天に向かって言っていることだ。「にこよん」というのは、高度成長期前、昭和三十年代前半の日雇い労働者の一日の賃金240円でした。100円を一個として「二個四」と呼んだようです。「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」というのは、日雇い労働者、その日暮らしの者の祈りだ、というのです。全てを天の父なる御神に委ね任せ、その日を懸命に生きる者の祈り、「神により頼みその日暮らしで生きる者」の祈り、とその教授は仰りたかったのではないのでしょうか。このような者こそ、今日の寡のようであり、主イエスが非常に喜ばれた生き方でした。

そのような「神により頼むその日暮らしの者」の姿を主イエスは、マタイの福音書で次のように語っておられます。「だから言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちの誰

が、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。ましてあなたがたにはなおさらのことではないか。」

このやもめは、まさに野の花のように、空の鳥のように、神に全てを委ね切って生きていた人ではなかったでしょうか。彼女は、「私の日用の糧を今日も与えたまえ」と真剣に祈りつつ、神から与えられたもので自分にできる事を一生懸命に行い、余ったものをお返しした。日々の命を神に養われている事を実感し、そこに生き抜いた人であった、と思います。それほどに、天のみ神との深く強く幸いな信頼関係に生きていた人なのです。

そして、それは、他の誰でもない、主イエスご自身の在り方でありました。

4 主イエス・キリストの姿

ある説教者が、今日の聖書について「何故、主は、わざわざ賽銭箱の向かいにお座りになって、群衆が金を入れる姿を見ておられたのか。」と問いました。そして「主は、誰かを捜しておられたのではないか」と言いました。その通りだと思うのです。このエピソードは主の十字架から数日前の出来事。主イエスがユダヤ教の権力者達に逮捕され、ローマ軍へと引き渡されて十字架に架けられる日は、目前に迫っていたからです。神の独り子は、全ての人の罪を贖う為の十字架の死を数日後に控えておられます。主は、ご自身の全身全霊を十字架上に神にささげられます。十字架が間近な日々の中、主イエスは、ご自身と同じように、徹底して自分を神に委ねて生きる者が、このエルサレムにいないだろうか、と探しておられたのではないのでしょうか。

そして、主は、見つけられました。主イエスは、やもめを見つけた喜びがあまりに大きかったので、弟子たちを呼び寄せずにはいられませんでした。そして、「はっきり言うておく」と語り始められました。「はっきり言うておく」と訳されているギリシア語は、「アーメン」。厳かに神の御子の權威をもって、神の御心について重要な事を語る時、主が使われる言葉です。「アーメン」と言うて語り始めた主イエス。続けて「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」と仰いました。「この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて」の「乏しい」と訳されているギリシア語は、「少ない中からその一部である乏しいもの」というニュアンスはありません。何もない、ということの意味する言葉です。つまり、「乏しい中から自分の持っている物すべて」は「自分の持っている貧しさ全て」と訳せるのです。そして、「生活費を全部入れた」の「生活費」は、命を示すギリシア語です。ですから、「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい自分をすべて、命を全

て入れたからである。」と訳したほうが本質を言い当てているのではないかと思います。

ご自身と同じように自分を神にささげて生きる者を見つけ出した大きな喜び、十字架の主イエス・キリストを慰め励ます喜びがここにあります。

5 アドベント

主イエスに倣って生きる生き方、つまり、このやもめのような生き方、人間的な保証を求めたのではなく、ただ父なるみ神に全てを委ねて生きて行く、そんな生き方は、この世界では、決して安全が保証された旅ではありません。むしろ、「冒険旅行」と呼んでいいのではないのでしょうか。何故なら、誰よりも、主イエス・キリスト、この方こそ、最大の冒険をなさったからです。主イエスは、父なる御神のみ許を離れ、この世界へと降ってくださり、私たちと同じ人間となりました。私たちが住むこの世界は、神のご支配が行き届き御心が完全になされる天の御国、主の故郷とは、全く異なる世界。神を神とするよりは、自分達を神として生きていきたいと願う人間達の世界、天とは全く異なる価値観が支配しているように見える世界です。自己中心的な思いにより、互いに愛しあうよりも憎みあいそねみあい、無関心という冷酷さが支配しているように見える世界。神の御子は、父の家である故郷を離れ、危険渦巻く外国へと来られました。信仰弱い私たちが、このやもめのように、神を神とし、神との強く深く大きい愛の關係に生きることが出来る為です。

今日から待降節。英語では、待降節のことをアドベント、と言います。そして、「アドベント」からできた単語があります。アドベンチャー、冒険です。クリスマスに始まる出来事、それは、神の独り子の冒険旅行なのです。

2000年前、最大の冒険物語を始めてくださった父なる御神とその独り子の深い愛と壮大な義を思い起す季節、主イエス・キリストの霊に導かれ、信仰の仲間と共に、このやもめが生きたこの冒険旅行を私達も始めたい、と切に願います。父なる御神に全てを委ね、主イエスがおられる神の国を目指して。祈ります。